

J A都市農村交流全国協議会は応募された実施事例を審査し、会員による交流活動の取り組みを通じて、J Aや農業のファンづくり及び地域の活性化を促す特に優れた活動として、3つのJ Aに対して優良活動事例表彰を行いました。

最優秀賞 J A糸島 女性部 「食」の支援活動

J A糸島は、福岡県の北西部に位置し、対馬暖流の影響により夏・冬ともに温暖な気象条件から、野菜、果樹、花卉などの栽培に適しており、年間を通じて多種多様な農産物の生産が営まれています。そんなJ A糸島の女性部にもコロナ禍で集まることさえできない時期がありました。何かやりがいのある活動がしたいと「家の光」や「農業新聞」を読み深め、こども食堂やフードバンクへの食品支援の記事が目に残りました。日本では7人に1人のこどもが貧困であるとされています。農業の盛んな糸島で食べることに困るという実感はありませんでした。そこで、社会福祉協議会やこども食堂の代表の方にお話をお聞きし、学校が長い休みになると給食がなく十分な食事がとれないこどもがいることや、シニア層の「孤食・孤独」の課題を現実として理解することができました。とりあえずやってみようと「食」の支援を開始しました。

多く買いすぎた食材や日用品、出荷しない野菜、廃棄する野菜、販売できなかった食材などを集めて、経済的な理由で食べることに困っている方に糸島の愛とパワーを届ける支援活動を女性部で計画しました。

2021年10月「いとしまこども食堂ほっこり」に食材を提供し、地域ボランティア団体と調理支援に参加しました。こども食堂では、こどもも大人もここに集うみんなで地域の食材を楽しくいただきました。

そして、使い切れなかった食材は、J A糸島に九州大学生から食材支援のメールがあったことをきっかけに、九州大学の寄宿舎に毎月2回程度届けています。ありがたいことに食材の仕分け作業に九州大学の学生たちがJ Aに足を運んでくれて、コロナ禍の学生たちと「食」について話す機会もできました。「アルバイトが減り収入も減って食費を切り詰めている」「留学生は母国に帰れず困っている」など。若い人が食べることに困っていると聞いたらじっとしていられません。同年の12月に九大フードパントリーを始めました。「九大生応援市」と名称を変えて2023年12月までに4回開催することができました。

コロナ禍で米価下落の影響を受けた農家支援のため、令和3年産糸島産米を2,700俵、糸島市とJ A糸島が買い取りました。それらは女性部活動の「食」の支援として生活困窮者や学生支援、飼料高騰に苦しむ畜産農家の支援に活用されました。学生の中には親と一緒に伊都菜彩に買い物に行ったり、女性部員や地域住民からは新鮮な野菜をもっと届けたいと作付けを増やすなど、J Aや組合員への予期せぬ経済効果も生まれています。

更に糸島市母子等寡婦福祉会、いとしまこども食堂ほっこり、NPO法人ゆるまちネットワークの3団体と協働して「糸こネットワークフードパントリー」や、平日にこどもたちが集う「こどもの居場所」にも食材提供を始めています。J A糸島と女性部が食材を集め「フードパントリー」を開催したことは、調理方法や糸島の食文化を伝える良い機会になりました。

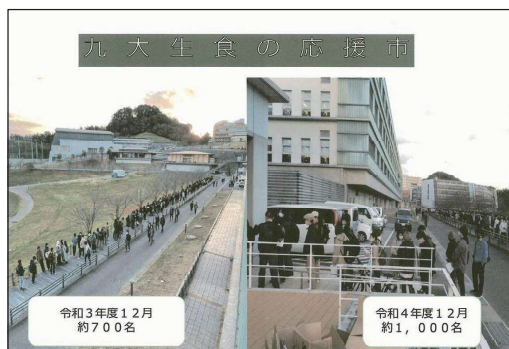
2年間で集まった支援品は33tを超えました。出荷者からは販売できなかった野菜や果物の支援、市民からは食材や衣料品・日用品の支援が続いています。この活動で食品ロス削減対策だけではなく、貧困問題、孤独・孤食、引きこもりなど現代社会の課題を身近に感じるようになりました。そして「エシカル消費（消費による社会的課題の解決活動）」ということばも知りました。コロナ禍に女性部活動再開を望む部員の声から始まった「食」の支援は「一人は

みんなのために、みんなは一人のために」を実感できる取り組みに成長しました。応援していた大学生が全国各地・世界各国に羽ばたき、日本の食農応援団が広がっています。

こうした支援活動は、助け合い組織であるJ Aグループが食と農を通じて地域社会への貢献するひとつの姿だと感じています。学生たちとの和が広がり、農作業に参加する学生がさらに増えることを望みます。食材の支援から始めた活動は、女性部とJ A、行政、学生、地域みんなで協力して互いに助け合い、「食」のありがたさ、農業の良さ理解者が育つ機会が増えました。組合長が言う「地域から信頼され、地域になくてはならないJ A」であり続けられることを女性部とJ Aが協力して目指していきます。



山崎 重俊組合長(右)と波多江 優子女性部長、
営農企画課岡崎 伸子さん(左)



「九大生応援市」は700人、1,000人と年々行列が増加している

優秀賞 J Aはだの 神奈川県秦野市で青パパイヤ??～熱い思いを伝えたい～ 青パパイヤ大作戦

J Aはだのは、神奈川県の中西部に位置し、東京や横浜など都市部に近く、豊かな自然や温泉、湧き水など観光資源にも恵まれています。

J Aはだでは、鳥獣被害低減の振興作物として青パパイヤを選定し、消費者への普及拡大を図っています。青パパイヤとは、ルーツとして食べられているパパイヤを、熟す前に収穫し、果実を野菜として利用するもので、機能性・健康野菜として注目されています。収穫時期が異なるだけで、熟したパパイヤは「果物」、熟す前の青パパイヤは「野菜」として扱われます。アク抜きした青パパイヤはエグみもなく、みずみずしくさっぱりとした味わいでサラダや炒め物などさまざまな料理に活用できます。

一般消費者であるユーコープの組合員に青パパイヤの成長過程、収穫そして食べるという一連の流れを体験していただいたことで、青パパイヤの存在を知っていただくいい機会になりました。元々、J Aはだのとユーコープは協同組合間連携の企画を模索しており、2022年の秦野市民の日のイベントの中で、振興作物である青パパイヤをぜひ取り上げたいという宮永組合長の意向を受け、ユーコープ西湘1エリア会から連携の企画をいただきました。J Aからは勉強会の講師、圃場の提供をし、青パパイヤの花の鑑賞会を7月に開催、10月には圃場で青パパイヤを収穫しました。



圃場では、こどもの顔ほどの大きさの青パパイヤを収穫

近郊の中華レストランに昼食会場を設定し、炒飯や麻婆豆腐、チンジャオロース、サラダといった身近な中華料理に青パパイヤを食材として使っていただき、消費者には身近で使いやすい食材として青パパイヤの意識づけができたものと感じています。今後さらに地域での消費を高め、地域でブランド化して「青パパイヤは秦野」と呼ばれるようにしていきたいと思っています。



J Aはだの 宮永 均組合長

優秀賞 J Aさいかつ 広報誌読者モニターアンケート

J Aさいかつは、埼玉県の南東部にある三郷市、八潮市、松伏町、吉川市で構成され、北部地域では稲作が、南部地域は葉物を中心とした農業が展開されています。

管内では年4回、広報誌「J Aさいかつ」を12万部発行し広く配布しています。誌面構成は、毎月の広報通信委員会で協議し編集を進めていますが、読者からの感想を直接確認するため「読者モニター」を公募することにしました。若い読者もターゲットにするため公式SNS（Instagram、facebook、X等）や、管内の地域コミュニティのサイトも活用しました。結果、一般から12名、地区ごとの割合も考慮して各支店の広報通信委員で8名、合計20名の読者モニターが誕生しました。任期は1年です。



12万部発行の広報誌「J Aさいかつ」

モニターへの質問事項は5点評価での各ページ掲載内容についてや、広報誌全体で一番興味深かった記事とその理由などです。スマートフォンで手軽に回答していただけるようGoogleフォームも紙ベースでの郵送と併用できるようにしました。半数近くがスマホからの回答となり、集計作業の事務負担軽減を図ることができました。

自由記入欄からは、「地元の飲食店情報を掲載してほしい」「文字サイズが小さく読みにくい」など改善・改良への前向きな意見も多数いただきました。当然と考えていたことでも、読者にとっては知らない情報も多いことが分り、広報通信委員では気付かない誌面改善のヒントが得られました。

自由記入欄からは、「地元の飲食店情報を掲載してほしい」「文字サイズが小さく読みにくい」など改善・改良への前向きな意見も多数いただきました。当然と考えていたことでも、読者にとっては知らない情報も多いことが分り、広報通信委員では気付かない誌面改善のヒントが得られました。

このような広報誌読者モニターアンケートを実施することで、J Aへの関心・理解が深まりイベント参加にもつながるなど複合的効果が拡大しています。この取り組みを継続し、J Aファンづくりに繋げていきたいと思っています。



J Aさいかつ 根岸 信一郎組合長